運河の街で
地域と世界を結ぶ
ビジネスパーソンの育成を

小樽商科大学

Otaru University of Commerce

小樽商科大学の学生ベンチャー企業の一社、i-vacsのメンバー。札幌の狸小路商店街を活動範囲としているが、この日は国内外の観光客でにぎわう観光スポットを調査



NPO法人EgaOはノベルゲームの製作や電子地域通貨流通のほか、「小樽あんかけ焼きそば事典作成プロジェクト」などを手がける。経済思想を研究するゼミとして、企業活動の時間以外は、経済学の古典の輪読や分析をおこなっている。学生が集まるのは、学生起業サポートルーム

学生ベンチャー活動中！ ビジネスの理論と実践の相乗効果

ビジネスを学ぶ大学として発展してきた小樽商科大学では、ゼミ単位での起業が盛んだ。学生でありながら会社を運営する経験はどう生きるのか。小樽商大発のベンチャー３社を取材した。



理事・副学長
江頭 進
えがしら・すすむ／1996年、京都大学大学院経済学研究科博士課程修了。博士（経済学）。専門は理論経済学。

学内にある学生起業サポートルームに、NPO法人EgaOのメンバーが集まった。小樽の魅力を紹介する自作動画や、新しく製作するゲームのポスターのデザインについて打ち合わせをする。EgaOは小樽商大の江頭進教授のゼミ生たちが2016年に立ち上げた。小樽の街の活性化をおもな事業目的としている。

経済学科3年の杉村卓郎さんは、小樽の街の記録を後世に伝える約8千枚の写真「兵庫コレクション」を題材にした、ノベルゲームの製作に従事する。ノベルゲームとはその後の展開を選択しながら読み進めるコンピューター上の小説だ。この5月に1作目を発表し、現在、2作目に取り掛かっている。1作目の公開時はSNSなどを通して小樽の魅力を発信、アピールし、若年層に認知されることを期待したが、60代以上の利用者が多く、想定通りにはいかなかった。2作目のストーリー作りを担当する杉村さんは「1作目での市場分析を生かし、前作よりプレーヤーの数を増やしたい」と意気込む。

EgaOではこのほか、電子地域通貨の本格流通に向けた流通実験の準備中だ。このプロジェクトを担当する企業法学科3年の三島一輝さんはこう話す。「消費増税の前後で、消費行動に影響があるか調査したい。電子通貨を導入してくれる店舗獲得に向け営業活動をしています」



副学長
近藤公彦
こんどう・きみひこ／1990年、神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程単位取得。専門はマーケティング。

実学主義から生まれる地域貢献型ベンチャー

小樽商大は国立大学で随一の規模を誇る商学系の単科大学として、ビジネス教育に力を注いできた。現在、こうした学生によるベンチャー法人7社が活動している。江頭教授は「授業で学んだ知識と実際のギャップに気づくことがベンチャー活動の意義の一つ。それが次の学びに生かされます。理論と実践を繰り返すビジネス教育を実現しています」と言う。

小樽商大のゼミは商品開発や販売先の開拓など、企業の実務を実践する実学主義が重んじられ、それが発展して起業に至る場合が多い。ゼミに入る前に、正課科目の社会連携実践「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト（通称マジプロ）」を履修する学生も多い。これは官公庁や企業、地域の人たちと関わりながら、チームで街の課題解決に取り組むプロジェクトベースの授業。このように地域密着型のビジネスに携われる機会を多く設けている。

正解のない活動のなかで たくましさが育つ

近藤公彦教授が担当するマーケティングのゼミからは、株式会社i-vacsが、11年に誕生した。札幌市の狸小路商店街でのはしご酒イベント「飲みポン」をおもに運営する。1年に11回を数え、前回は60店舗ほどが協力。客数は約1200人に達したという。評判が広まり、大手企業から販売促進の協力依頼の声がかかることも。最近では、若い年代にコーヒーを広めたいという飲料メーカーからの依頼で、学内やイベントで取ったアンケートなどをもとに同世代の消費行動を探った。

「学生たちは現実のビジネスのスピード感に四苦八苦しますが、社会人の方々とやり取りしているなかで叱られたりほめられたりすることは、貴重な体験です」（近藤教授）

18年に設立された合同会社えんちゃうは、ゲストハウスの運営がおもな事業だ。担当教員の猪口純路教授はベンチャーでの活動を「究極のアクティブラーニング」と表現する。運営するゲストハウスは国内外の旅行者に小樽の生活文化を楽しんでもらうことがコンセプトだ。

しかしいざオープンすると収益達成に追われ、当初の目的がないがしろになることもあった。そのため学生たちは改めて街に出て観光客に調査を実施。多くの人が街の文化にも興味があると回答し、自分たちが掲げたコンセプトに確証を得た。代表を務める商学科3年の北市圭人さんは、「正解のないことばかりですが、みんなで議論して進めることで、いい成果が得られると思います」と話す。

江頭教授は、「ベンチャー活動の本当の目的は商売が上手になることではない」と言う。

「自分の力で生きていくすべを身につけてほしいのです。そのためには勉強して知識を得て、いろいろ実践してぶつかることが大切です」



小樽郊外の民家を改修した建物でゲストハウス「順風満帆」を営む合同会社えええんちゃう。クラウドファンディングや直接営業で資金を調達。地元建設会社の協力もあり、2019年開業。小樽の魅力を伝えるため、地酒を楽しむイベントなども企画する

大学院商学研究科
アントレプレナーシップ専攻教授
猪口純路（前列中央）
いのぐち・じゅんじ／2010年、神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程単位取得。専門はマーケティング。

学内で国際的な環境。「グローカルコース」が主専攻としてスタート

小樽商科大学は1911年の開学当時から語学教育に力を入れ、「北の外国語学校」とも呼ばれていた。現在も英語を含む7言語を学ぶ環境を整え、留学制度を充実させている。そうした国際教育を進化させたのが、2015年に始まった「グローカルマネジメント副専攻プログラム（GMP）」だ。

グローカルとはグローバル（地球規模）とローカル（地域）を掛け合わせた造語。プログラム名は、「グローバルな視野で考え、ローカルの視点で行動する学生を育成する」という教育理念のもと付けられた。地域の課題に取り組む授業や言語習得の科目のほか、英語による経済や経営の授業が受けられる。これはもともと交換留学生のための授業だったが、日本人学生も一緒に受講できるようにした。グローカル教育部門長のプラート・カロラス教授はこう話す。

「英語で専門科目を学ぶことには、国際的に通用する気づきを得られる利点があります。海外の事例を知ったり、留学生の意見を聞いたりすることで、世界との違いに目が開かれます」

GMPが導入されて5年。これまでは専門の学科に並存する形の副専攻だったが、21年度に主専攻としての「グローカルコース」が誕生する。

「GMPは英語での授業が多くてハードですが、意識の高い学生が集まっています。卒業生の多くは大手企業、国際的な企業に就職しています。一定の成果が出ていることに鑑み、主専攻にして、グローカル教育にさらに注力しようと考えました」

こう話すのは、鈴木将史副学長。グローカルコースは学部とは別の入試を実施し、初年度は定員20人で募集する予定だ。カリキュラムはGMPをほぼ踏襲するが、留学を必修化する。

5万円からの留学制度と複数回の留学機会

小樽商大の留学制度には、おもに1年生が履修する「事情科目」での約3週間の海外研修がある。オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、マレーシアの大学が受け入れ先で、ホームステイをしながら、英語を学ぶ。卒業生で元日本オラクル会長の佐野力さんからの寄付による給付型の奨励金が用意されており、毎回60人が約5万円の自己負担金のみで留学している。

「グローバルな視野を早いうちに養い、英語力の必要性を実感する。それを2年次以降の留学につなげることが目的です。グローカルコースの学生には必須だと考えています」（鈴木副学長）

GMPの科目の一つ「グローカルフィールドワーク」では地場産業を支える企業などを訪問。この日は発表の日で、2人の日本人学生も英語でプレゼン



小樽商科大学



商学科教授
グローカル戦略推進センター
グローカル教育部門長
Carolus Praet

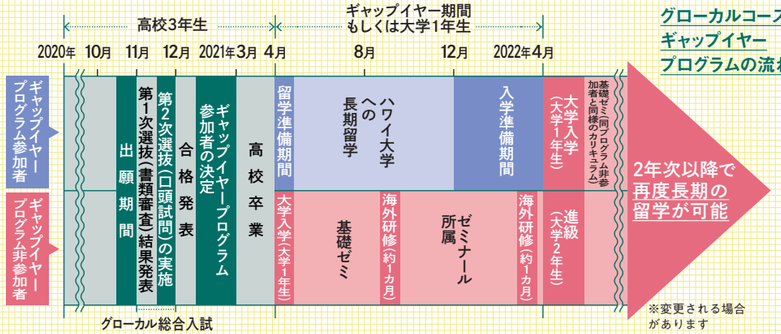
プラート・カロラス／1992年、オランダ国立ライデン大学大学院文学部日本学科修了。97年、神戸大学大学院経営学研究科博士後期課程単位取得。専門は国際マーケティング。



理事・副学長
鈴木将史

すずき・まさふみ／1989年、北海道大学大学院文学研究科修了。専門はドイツ文学。小樽商科大学言語センター教授。

グローカルコースとギャップイヤープログラムの流れ



学生生活を充実させるギャップイヤープログラム

また、新たに設けられるのが、ギャップイヤープログラムだ。大学に合格した学生が一定期間の休学を経て入学するギャップイヤーは、欧米ではめずらしくない。小樽商大では休学ではなく、1年間の入学猶予を与える方針だ。その間、ハワイ大学のコミュニティーカレッジなどに留学する。鈴木副学長はその意義を「留学経験を大学生活でフルに生かせること。4年間の充実度が全く違います」と話す。

2年次に長期留学した場合、帰国後は残り、正味1年しかない。だが、ギャップイヤープログラムなら、学んだことや新たに芽生えた問題意識や価値観を、その後の4年間で探究できる。

プラート教授はグローカル教育の意義を大きなスケールで見ていると言う。

「利益を得る経済活動だけでなく、地球規模の課題に立ち向かう人材の育成が急務です。そこには哲学や倫理観も大事。それは小樽商大の開学からの教育理念の一つでもあります。今もその延長だと考え、新しいグローカル教育を実践していきたいと考えています」

学生の声 from STUDENTS

ギャップイヤーのおかげで大学でしっかり学ぼうという意識が高まりました

2019年度から入学を1年猶予し、大学入学前に長期の海外留学ができるギャップイヤープログラムが始まりました。私はこの制度の試行プログラムを利用し、1年次の8～12月、海外留学に挑戦。留学先では、さまざまな国の友人と刺激し合い、英語力が飛躍的に伸びたとともに、帰国後は世界そして地元についてもっと学びたいという思いを抱きました。通常、3年次に交換留学する場合が多いですが、それでは帰国後すぐに就職活動をする必要に迫られます。しかし、このプログラムを使えば大学生活は帰国後、まるまる4年あり、留学での学びを生かすには十分な時間です。この制度で多くの人に早い段階での海外留学に挑戦してほしいです。



ギャップイヤーで英語力もアップ

商学部商学科2年
片倉玄太さん

GMPを履修したことで留学生の友人ができ視野が広がりました

GMPを履修したきっかけは、1年次に事情科目で参加したニュージーランド留学です。現地での生活を体験し、海外の学生と勉強するのが楽しく、日本でも同じような環境にいたいと思いました。GMPの英語での授業は最初、なかなか聞き取れませんでしたが、やがて留学生に英語で質問できるまでになりました。ディスカッション形式の授業が多く、自然に英語力が養われました。特におもしろかった科目が「グローカルフィールドワーク」です。留学生と一緒に地元のワイナリーなどに出かけることで、自然に会話が弾み、今も友人として仲良くしています。社会に出てもこうした多様な人たちとともに学んだことが生かされると思います。

GMPはまるで海外留学



商学部商学科4年
髙橋晴香さん